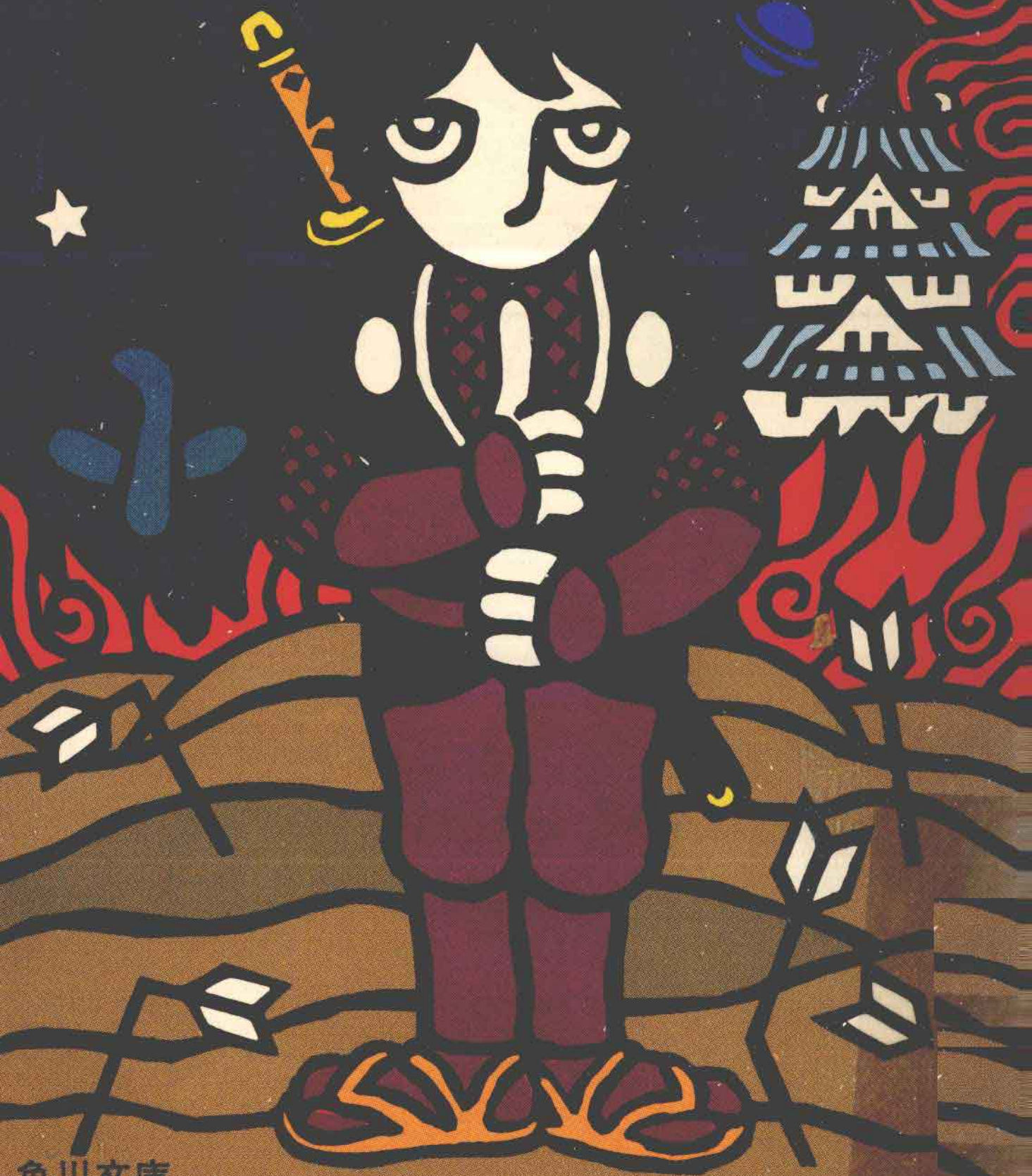


戯曲

真田風雲録

福田善之



角川文庫

角川文庫

さなだ ふうりんろく
真田風雲録



昭和四十八年十月三十日
昭和四十九年二月二十日
初版発行
再版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者 福田善之

発行者 角川源義

印刷者 村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式會社 角川書店

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・多摩文庫

0193-134701-0946(1)

戲 曲

真 田 風 雲 録

他 一 篇

福 田 善 之



角 川 文 庫

3114

目次

戯曲 真田風雲録

丑

戯曲 オッペケペ

三九

あとがき

解説

奥野健男 二九

戯曲

真田風雲録

——講談と歴史による三部十七場の娯楽劇——

△登場人物▽

むささびのお霧 (のちに霧隠才蔵)

離れ猿の佐助 (のちに猿飛佐助)

すく入の清次 (のちに三好清海入道)

どもりの伊三 (のちに三好伊三入道)

かわうその六 (のちに海野六郎)

根津甚八

寛 十蔵

望月六郎

由利鎌之助

穴山小助

——以上ご存じ真田十勇士

真田幸村

大野修理 (大坂城執権職)

大野道犬 (修理の父)

織田有楽斎

後藤又兵衛

木村重成

豊臣秀頼

淀 君

千 姫

根津甚八の少年時代

関ヶ原の武者 A

// B

茶坊主

人足頭

坂崎出羽守

徳川方の将兵たち

豊臣方の将兵たち

第一 風の巻

大太鼓で幕があく。

武士、農民、商人などなど、それらしきいでたちの男女十人ばかり、うたい舞う。

「下剋上のブルース（あるいはロック）」

人をみたら鬼とおもえ

鬼をみたらわれとおもえ

きのうの友はきょうの敵ぞ

きのうの敵もきょうの敵ぞ

股またからのぞけば天地はさかさ

にっこりわらって主を刺さん ホイ

風うならば腕を撫ぶさん

波たけらば舌なめずらん

弱きをねらい強きに日和れ

ひとすじの槍か三寸の舌か

股からのぞけば天地はさかさ

にっこりわらって妻を捨てん　ホイ

つぎのような内容、あるいは気持、を文書化して示したい――

「十六世紀の日本は戦争ばかりだった。戦国大名の争いが、足輕の子量臣秀吉の制覇によって一応おわると、つぎは朝鮮戦争だった。

と同時に――農業技術の進歩などによる生産力の拡大、商業の隆盛、貨幣の全国的流通。そして海外貿易の発展によるヨーロッパ文明の流入。キリスト教。

日本は大きく変わろうとしていた。いや、変わる条件だけは充分だった」

右をぼくの拙文でなく、たとえば「くにのあゆみ」かなんかからの引用文でできればごきげん。絵図など使用もよろしい。

さて、第一場がはじまる。遠くきこえる合戦のひびき。ドドンジャン、うわア。

その一 関ヶ原の夜、八勇士相会する事

「一六〇〇（慶長五）年九月十五日」

関ヶ原の一角。といっても谷あいの灌木などに囲まれた見透しのきかないところ。いまでも二人の武者の間に凄絶な死闘が展開している。

かなり暗い。時折り一陣の風が、いや、この日朝からあつく垂れこめて陽光をさえぎっていた霧が、ちぎれちぎれに吹きすぎるのだ。

二人、かなり疲労困ぱい。いつのまにか、霧から湧いたように、一人の男とも女ともつかない汚ない浮浪児があらわれて死闘を見物している。むささびのお霧（十二）。
争う二人のまわりをうろつきながらしげしげと眺める。

お霧（武者Aに）東軍？ おじさん。

武者A（あえぎながら）に、西だ。

お霧（武者Bに）じゃ、おじさんが東だね。助太刀するぜ！（いい放つと石を武者Aに投げる）

武者A わっ。ひ、卑怯！（よろめくところを、Bについて討たれる）

武者B（へたへた坐る）ふう……

お 霧 悪い首じゃないぜ。ま、三十石、五十石かな、五十石馬廻り。(死体の懷中をさぐって金袋をとる) はやく首もってけよ、おじさん。いそがないとごほうびもらえないよ。ね？

武者B む、む、そうだな。(いそいそと首をとりにかかる)

お 霧 待った。

武者B なんだ小僧。

お 霧 助太刀料。

武者B (わらって) ばかをいえ。

お 霧 よう。

武者B うるさい。(ふり払う)

と——いつのまにか自分が大小の浮浪児たちに囲まれているのに気づく。

ずく入の清次(十六)、どもりの伊三(十四)、かわうその六(十三)。

武者B なんだ、なんだ餓鬼ども。

清 次 (大兵で貫禄がある。やさしく) おじさん……ただはひでえよ、ただは。(仲間にな。

仲間たち

六 おじさん、この子(お霧)かわいそうなんだぜ。こないだの戦争で身寄りみんななくしちゃったんだぜ。おとつつあんはころされるし、おっかさんはズラかるし。

武者B おれの責任かよ、それが。

六 だっておじさん、おとなだろ。おとなは責任あるよ、みんな。だからおじさんもあるよ。な。

仲間 ん。(囲んだ輪をだんだんちぢめてゆく)

武者B (おびえて) お、おとなにも、いろいろ、あるよ。

清次 あるよ。知ってるよ。でもおじさん特別な大人にゃ見えねえよ。な。

仲間 ん。(さらにちぢまる)

武者B (死体の脇差をとって) よし、これやるからあっち行け、な。

清次 (すいととりあげて、やさしく) なめちゃいけねえ、ふざけちゃいけねえ、おれたちのブツに手出ししてもらいたかねえ。な。

武者B う、うん。

六 死体の処理はおれたちがやるよ、だけど生首なんていらねえよ、だけどおじさんがたは生首だけいるんだよ、だから生首売るんだよ。ね？

清次 だからお代払いなよ、お代。

武者B ガ、ガキども――

清次 なんていった？ 聞こえねえ。

武者B わかったよ。(自分の印ろうなどとられる)

お 毎度どうも。

清 次 安いもんだ、武士は名誉が肝心。

六 出世するぜおじさん。ごきげんだよご主人、この首もってきや。ま、十石は堅いよ。

あ、手伝うよ首とんの。

武者 B すまんな。

武者 B、清次、伊三、六が死体をかげに運んで行く。

お 霧 (呼びかけて) おじさん、あたいうもう一つぐらいみつけてやるよ、首。

お霧が舞台に残って歩きまわっていると、別の方から傷を負った若い武者がよろよろと出てくる。ぐったり腰を下す。お霧、様子をみて、もどってきた清次と打ち合わせ、それから若い武者のところへぶらぶら行く。清次はすぐ退場。

お 霧 おじさん、東軍？

若い武者 (じろりとみる)

お 霧 西軍だね、その様子じゃ。……怪我してんの？ (相手が黙っているので、一人でしゃべる)

……でも、惜しかったね、昼間は……いいとこまで行ってたのにね。ほんとは、あたいう西に賭けてたんだ。穴は狙うもんじゃないね……でも、さ、味方の裏切りさえなきやね、ほら、あの、三ツ巴どもよもんどころの紋所んとこの――

若い武者 (じろりと見る)

お 霧 ……疵きず、いたいなの？

若い武者 (呟く) 小早川か!

お 霧 あ、そう、そんなことだった。……知らなかったの? いままで。

若い武者 霧だよ。

お 霧 え?

若い武者 霧。この霧だ。……夜の明け前から小雨がしょぼしょぼと降り出した。日が昇れば一
間先も見えぬ深い霧だ。山あいだものな。……わずかに晴れて、先手の旗差し物が見え
たと思えば、敵の旗だった。——もうはじまっていたんだ、いくさは。

お 霧 (こらえていたのが、吹き出す)

若い武者 なんだ? 小僧。

お 霧 ごめん。だって、お霧ってんだ、あたいの名前。ね? (笑う) あたいがちっちゃいとき、
ボヤツとしてフワーツとしてて、いるんかと思うといなかったちゃったりしたからだろう
ね……でも、そいじゃ食ってけないもんね。女なんだよこれでも。あたいはひとりぼっ
ちで、ひろわれてお寺で育てられて……ごめんね、おじさんの話、途中で。ね、それか
ら? どうしたの、それから?

若い武者 (間) あとはもう乱戦さ、くつわを並べて友と馳けていると思えばそれが敵、よき敵ご
さんなれと槍をしごいてつかければ味方だ。……それでも形勢がほぼ互角らしいこと
はわかっていた、昼頃までは。……にわかに様子が変わった。馳けめぐるうちに出逢う

相手の、五人に四人は敵になった。やがてすべてが敵だ。ぐるりみんなが部厚く敵だ。敵の旗だ。おれはいっさんに馳けた。方角も見えねえ、槍もいつか手にねえ、おれは刀をやったためたらにふりまわしながらただ走った。(間)それでもおれは、おやじが鉄砲に撃たれて倒れるのを見た。兄が討ち死にしたことも聞いた……友人も朋輩もあらかたは死んだらう。

間。

お 霧 じゃ、おじさんもみなし児だね。おんなしだ。

若い武者 (苦笑)

お 霧 でも、よかったね、生きのこって。

若い武者 生き恥さらすつもりはねえな。(間)お霧っていったな。親はないのか。

お 霧 (こっくり) おじさんの名前は？

若い武者 おれか、おれは大谷刑部少輔吉継さまの——どうでもいいなそんな事アもう……十蔵さ、寛十蔵。

お 霧 むささびのお霧ともいうんだ、あたい。兄貴がつけてくれたんだよ、ずく入の清次、やつぱりお寺にいるヤサグレさ。上になんかついてないと、らしくないからって。

若い武者 (笑う——笑いながら彼、寛十蔵は、上手からずく入の清次とどもりの伊三が、最前の武者Bともに来てこちらをうかがっているのにちゃんと気づいている)

清次 (武者Bに) 大丈夫だって。相手は怪我人だぜ。え？

武者B む、そうだな、よし。(行きかけて) 頼むぞ、助太刀。頼んだぞ。

清次 まかしとけて。

武者B (刀をかまえて寛十蔵に) 西方の武者と見た。いざ勝負！

寛 (びっこをひきながら、立つ)

伊三 (お霧に) カ、カ、カ、

お霧 (十蔵に) 悪く思うなよな、おじさん。

伊三 カ、(やっ) 賭けよう。

お霧 あたい、西のおじさんだな。

伊三 ヒ、東だ、おれ。

武者B やあッ。(打ちかかる)

しかし十蔵、圧倒的につよい。Bむんずと首根ツ子をつかまれ、片手であっさりねじり殺される。
お霧とび上って喜ぶ、伊三しょんぼり。

清次 (驚嘆) 強えなあ。(さっそく武者Bの具足をはがしにかかる)

伊三 (寛に) ク、首買う？ おじさん。

寛 もっと強えの連れてこい。(自分の首を叩いて) これやる。

お霧 ね、ずく入……このおじさん、仲間に入れねえ？